
春よ、来い

智明

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春よ、来い

【Nコード】

N0410C

【作者名】

智明

【あらすじ】

ある春の日「私」^{ちさと}は大学のサークルで「先輩」と出会う。その日から「私」の片思いが始まった。

第一話

私の大切な人達はみんな弦楽器を弾いていた。

ヴァイオリン、ギター、チェロ。

みんな楽器を愛していて、みんなが奏でた音は今も私の耳に残っている。

彼女が弾いたヴァイオリンの澄み切った音、先生が奏でる優しい響き、

そして、彼が弾く正確な音階。

もう一度、聴きたい。そう思う。

でもそれはもう叶わない。みんな、いなくなってしまった。私を残して。

音だけを、私に残して。

初めて私が弦楽器を奏でた日、というか、先輩に出会った日、

私は覚悟をしなければならなかった。彼は私の大切な人になる事、

そして近い未来に彼が私の前からいなくなってしまう事を。

もしかしたら気づいていたのかもしれない。

でも、あの日は春で、すべての生き物が輝いていて、

それに少なくとも彼は、はかなさとは対極に位置しているような人だった。

だから、気づかなかった。違う、気づけなかったんだ。

太陽が輝いている間、私たちは夜を忘れる。それと同じ事だ。

「ギターでも種類があつてね、うちの部活ではクラシックギターを使ってるんだ」

そついうと目の前で彼が音を出した。良く知っている、ギターの音。

弾いてみる？そう尋ねられて私は首を縦に振った。

彼が私にギターを渡した。私は恐々それを受け取った。

初めてのギターの感触。ぴんと張られた弦。どう奏でればいいのだろう。

「まず、足を組んで、その上にギターを乗せて・・・、そつそつ、それでいい」

彼が私の手を取った。

「ここ押さえて、この弦を弾いて」

言われた通り、弦をはじいた。ぼろん、となんと情けない音が出た。

彼が笑った。初めてだから仕方ないよ、そう言って。

「えっと、もつと指をこっちに動かして・・・はい、もう一度」

指でもう一度弦を弾く。知っているギターの音がした。多分、ドの音だろう。

「そうそう、今のがドの音。で、次は・・・」

彼は丁寧にド、レ、ミ、ファ、ソを教えてくれた。

その時の彼の横顔が美しかったことを私は今でも覚えている。

その後私は何度も彼の横顔を見ることになったけれど、

それでも一番最初に見たあの横顔が一番美しかったと今でも思う。

伏せられた瞳、二重の薄いまぶた。ギターの音階。春の日差し。

私の知らない世界がそこにあった。

白い教室には相変わらず日差しが差し込んでいる。

そうだ、私は何をしていたんだっけ。

半分夢心地のようにギターを弾いていた私はふと現実に取り戻された。

私は見学に來ただけだったんだ。

たまたま掲示板にポスターが貼られているのを見つけて、なんとなく來ただけだ。

まだ他に見学をしたいサークルは他にもある。

「この後、部活があるんだけど、来てみない？」

数秒間、私と彼の間には沈黙が流れた。ついていたら、もう戻れないだろう。

けれど、このまま帰るのもいやだった。

もうちょっと、彼を見てみたい、そう思ってしまった。私は覚悟を決めた。

「行きます」

「よし、じゃあ、部室まで案内するから」

多分、もうその時には私は先輩を好きになっていたのだろう。

誰かを好きになった瞬間、それは終わりへと向かい始めるといふ。

それが速いか遅いかの違いだけがそこにあつて、永遠はない。

でも私は、先輩と出会って失うまでの一年間が永遠だったと思う。

永遠が限りなく続くものだとするなら、私の中での一年はまだ続いている。

たぶん終わりはこないだろう。

第二話

少なくとも、と目の前の友人が言った。

「先輩には彼女がいる。誰かは知らないけどさ」

「そう、やっぱり」

「仕方ないよ、普通にかっこいいし」

部室の中には友人と私しかない。友人はテレビの画面を見つめたままだ。

手がせわしく動いている。野球のゲームをしているらしい。

友人はやけに明るく彼とも仲良しだった。

私より後に部活に入ってきたはずなのにこの違いは何だろう。

仲良しということは、何か彼の事を知っているのかもしれないと、自分の気持ちというものを思い切って打ち明けてみた。

「避けてほしいのは部活の雰囲気、気まづくすることだね」

「分かってるよ」

少し痛い言葉だった。

けれど、自分の気持ちを伝えるほどの勇気をあいにく私は持ち合わせていない。

部活に入って一ヶ月。ギターの腕は随分ましになった。

彼、というか先輩の事も少しずつ知ることができた。

お酒が弱いこと、経済学部だという事、甘いものが好きだということ、などなど。

そして私は相変わらず、先輩のことを好きだった。

私はギターを取り出した。基礎練を繰り返す。
指先が硬くなり始めている。私もいつか、先輩のように弾けるようになるのだろうか。

「今日部活出るの?」

友人が私に尋ねた。

「出るよ」

「頑張れよ」

「何が」

「ギターの練習」

「言われなくても頑張る」

「恋してるね」

「からかってる?」

「うん」

友人は相変わらず画面を見つめたままだった。
なんか悔しくなって私はギターをケースにしまった。

指先が痛い。心も少し痛い。

――馬鹿みたい。

心が呟く。

たかが、彼女。されど、彼女。

先輩が私を見てくる日は、この先ずっと、やってこないかもしれない。
い。

彼を通して存在する彼の彼女。

たった一人の不在が与える影響は痛いほど知っているけれど、
たった一人の存在がこんなに影響を与えることを初めて知った。

誰かを好きになることは、きつと悲しいことなんだ。

心臓は一生のうち何回鼓動を刻むか決まっているという。

だとしたら、私はきつと長生きできないだろう。

先輩が隣に座る。指の動きを見られる。指を触られる。

先輩にしてみたら何もない事だろう。

私だって分かってる。だけど脳と心は繋がっていないらしい。

今日の部活で私は何年寿命を縮めてしまったのだろう。

今日の部活で、コードを初めて習った。

しかも先輩が隣に座っていた。

二年は一年の指導のため一年の隣に座ることになっているのだ。

一気に弦を押さえられない私に、彼はいろいろとアドバイスをくれた。

フレットに垂直に指を立てること、手首を内側に入れること、など。
もし、私が先輩に何も感情を抱いていなければ、それはただの指導。
でも、違う。

私は、先輩が好きだ。

だから、一つ何か私にしてくれる度、心臓の音が大きくなる。

体いっぱい響くこの鼓動は、当たり前だけど、先輩には聞こえない。

もう一度私は弦を押さえた。相変わらず、音はきれいにでてこない。

「どうして音が出ないと思う？」

「えっと・・・あ、小指」

指に目を向ける。1弦に小指が触れているのがわかった。

「あたり」

先輩が私の小指を軽くフレットから離れた。心臓の音が一段と大きくなる。

サウンドホールの前の弦を彼が一弦づつ弾く。

鼓動に塞がれた耳に響く音色はとても綺麗な音だった。

「コードなんて慣れだからさ、練習すれば押さえられるようになるから」

「あ、はい。ありがとうございます」

例えコードには慣れても、先輩に慣れることはしばらくない気がする。

先輩を好きになってからだ。

客観的に見ればどうでも良い事が、酷く輝いて美しく見える。

恋というものはそういうものだ、そう言われればそれまでだけど、
だとしたら私は、きつと夢を見ているのだろう。

この現実の世界がこんなに美しいはずがない。

目をあけたまま、私は夢を見ているんだ。

それが覚める時は何時やってくるのだろうか？

第三話

春という季節はとても短い。

ああやつと来た、そう思ったとたん初夏と呼ぶのにふさわしい季節になっている。

濃い緑は、春という季節には似合わないからかもしれない。

春の暖かな日差しより、夏を思わせる強い日差し。

風が運ぶ青々しい匂い。

そう、気が付いたらもう少しで雨の季節、梅雨がやってくる頃になっていた。

そして私、というか一年生にとって初めての演奏会も近づいていた。

演奏会は合奏曲、学年曲、個人曲で構成されていて、

合奏曲は部員全員、学年曲はそれぞれの学年、個人曲はソロ、デューオ等で出たい人のみとなっている。

私はもちろん合奏曲と学年曲のみしか出ない。二つの曲だけでいっぱいだった。

先輩は合奏曲、学年曲、加えて個人曲を3つ出る。

リハーサルで見た先輩の弾く姿は私の目を捕えて離さなかった。

音がものすごく綺麗な訳ではない。それだったら先輩より上手い人

はいる。

好きだから、それもある。

とにかく先輩の弾く姿はとても真剣で、とても楽しそうだったからだ。

その姿勢が羨ましくて、恰好よかった。

だから最近の部活は演奏会に向けて、いつもより練習がきつい。

特に曲数を抱えている人達は大変そうで、部室にいつ行ってもギター
の音がしていた。

その練習のせいか、4月には柔らかかった指先がほんの少しだけ硬
くなった気がする。

一回だけ触らせてもらった先輩の指先に比べればまだ柔らかかった
けれど。

曲の完成という事はミスなく弾く事ではないと、ギター部に入って
分かった。

強弱、大きさ、合奏曲なら正しいテンポをキープしながら他のパー
トとのタイミング合わせ。

ソロなら曲を曲として成り立たせる事。

そついう幾つもの事をクリアして曲は完成する。ミスをしないなん
て当たり前だった。

とはいえ、そこは入部したてで初心者だらけの一年生。

曲を形にするのが精一杯で、曲の流れなんて考えられなかった。

先輩たちも一年生の指導には音をとにかく出す、ぐらいいしか言わな
い。

私はただ楽譜に書かれてる音をギターで奏でる以上の事は出来なかった。

それでもこの二カ月近く、かなりギターに時間を費やしてきた。先輩の存在は大きいけれど、それに加えてギターの持つ魅力に引き込まれていた。

彼らがどうしてあんなに自分たちが奏でる楽器を愛していたのか、私は徐々に理解していた。

「俺にとっては音色がさ、皆違っただよ。他の楽器もそうかもしれないけど」

「そうなんですか？」

演奏会前の最後の練習の後、幸運な事に私は先輩と二人きりで帰る事になった。

もう以前のように鼓動で耳を塞がれる事はなかった。

先輩がいる状況が日常になり始めていたからだ。

夜の闇が先輩の存在を曖昧にしてくれていたからかもしれない。

部活に慣れたか、ギターは楽しいか、などなど他愛もない話が続いて、

ギターの良さについて話した時だった。

「啓太なんかガツガツした音、分かるでしょ？」

「ああ、確かに」

私の先輩への想いを唯一知っている友人を思い出して、笑ってしま

啓太、啓ちゃんは音は大きくて良いのだけれど確かに弾き方が繊細ではなかった。

啓ちゃんはそのなりの経験者なのに根がエレキだからなのか何なのか、

バラード系の曲がとても似合わない。

「ちさとちゃんは、爪が無いから少しこもってる。でも優しい感じだよ」

先輩が言う。

確かに爪がなくてもった音だと前々から分かっていた。

だから優しい感じ、はお世辞だとしてもちゃんと聞いてくれている事は事実であって、

その事はとても嬉しいのに、恥ずかしい。

きつとそれは特別ななんかじゃなくて先輩にとってそれは部活をやっていくうえで自然な事。

でも私にとって、それはとても特別な事。

私が先輩を見ているように、例えばその何万分の一でも先輩が私を見ていてくれるのだから。

「私なんて全然駄目ですよ、周りの音も自分の音も聞こえないです」
「まあ仕方ないよ。まだ始めて二か月でしょ？でもそういう個人の音がまとまって合奏とかする訳だから、何て言うか凄い事なんだなって俺は思う。だからギターが好きなんだよね」

そう言いながら背中に背負ったギターを軽く叩く。

ハードカバーの固い音が答えるように響く。

まるでそれは会話のようだった。

先輩のギターと先輩だけにしか出来ない、会話。

「明日の演奏会、頑張ろうね」

「はい、お疲れ様でした！」

駅からやってくる明るい光が先輩との時間を終わらせる。
改札を通れば、別々のホームに行かなくてはならない。

軽く先輩は手を振って、階段を上っていく。

私は少しだけ先輩の背中を見送って階段を上った。

――ああ、私凄く幸せだ。

電車を待つ時間、電車に乗っている時間、家に着いた時、そして眠りに落ちる瞬間。

自分でも分からない幸せが心を満たしていた。

その日から、その幸せは先輩といた一年途切れる事がなかった。

満たされる事はなくてもどこか心の中でいつもその幸せがあった。

一生分の幸せを貰ってしまった。

だからあの時の私は幸せに目を塞がれて、少し先の未来と、少し先の過去が見えなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0410c/>

春よ、来い

2010年10月10日20時42分発行